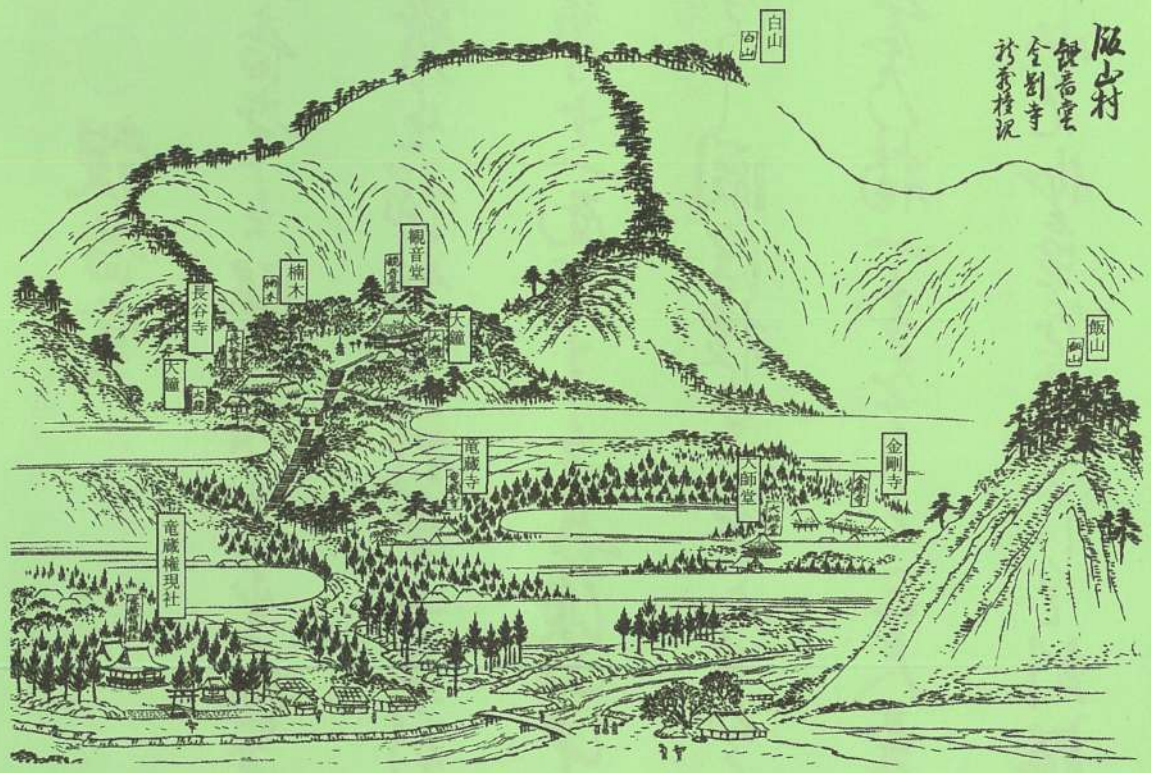
古文書を読もう

第36号
令和8年3月

古文書で知る郷土の歴史

古文書で知る郷土の歴史（十八）
『相中留恩記略』⑪



絵図：国立公文書館所蔵版の絵図を加工

今回は飯山村です。絵図の後方に白山（標高二八四m）、手前には小鮎川の流れと庫裡橋。その間に寺社が描かれています。右下には『新編相模国風土記稿』で飯山の村名の由来とされた飯山（飯盛山）が見えます。

飯山は古代からの聖地で、伝承によると飯山観音と龍蔵権現は神亀二年（七二五）、金剛寺は大同年間（八〇六～八一〇）の開創といわれ、飯山観音は行基が、金剛寺は弘法大師が開いたとされます。

丘の上に見える観音堂は坂東三十三観音霊場六番札所の飯山観音として知られ、本尊十一面観音は行基作と伝えられています。現在の観音堂は十八世紀中期の建築と推定され、その横の大鐘は嘉吉二年（一四四二）、飯山の鋳工清原國光の作で県指定重要文化財です。また、坂の途中の山門には、宝永六年（一七〇九）、飯山村の住人安西金左衛門が寄進した金剛力士像が納められています。

絵図で、橋の右奥の金剛寺は、鎌倉幕府が編纂した歴史書『吾妻鏡』に養和二年（一一八二）、源頼朝に訴状を出した記載がある古刹です。大師堂は明和七年（一七七〇）の建立と伝えられ、現在は収蔵庫に納められている**定朝**（じょうちょう）様式の阿弥陀如来坐像（国指定重要文化財）も、当時は大師堂にありました。

絵図の左には飯山村の鎮守龍蔵権現社（現龍蔵神社）が見えます。拝殿は宝暦元年（一七五一）の再建です。

絵図中央の龍蔵寺（龍蔵院）は龍蔵権現社の別当寺でしたが、明治の神仏分離で廃寺となりました。飯山（飯盛山）も高度成長期に産業用土砂として採取され、今はバス停の名（飯盛山）として残るのみですが、小鮎川の流れと白山、古い社寺の佇まいに当時の様子がしのばれます。

定朝：平安時代中期に活躍した仏師。代表作は宇治平等院鳳凰堂阿弥陀如来坐像（国宝）。平安貴族好みの柔和で優美な定朝様式は、平安後期の仏像の典型。

厚木市古文書解読会　あつぎ郷土博物館に収蔵されている古文書の解読に取り組んでいます。興味のある方は第2、第3、第4木曜日に活動していますのでお問い合わせください。

あつぎ郷土博物館　TEL 046－225－2515

第コラム趣

火と灯火具の変遷

近代に至るまで灯りは〝火〟であった。

古代、自然の火（火山噴火・落雷）を利用したことから始まり、暖房・調理・夜間活動・獣除けなど、火は生活を劇的に進化させてきた。古代から中世・近世へと時代が移るにつれ灯火具は多様化され、灯明皿・燭台・行灯など、携帯用には松明・提灯や龕灯などいろいろと工夫がなされていく。

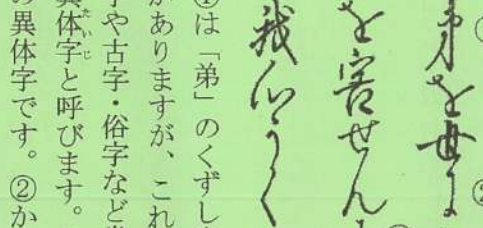
仏教伝来により蝋燭も入ってきたがとても高価で庶民の手に届くような物ではなかった。蝋燭は室町時代には国産されたが高価で、庶民は菜種油や魚油といった比較的安価な物を使っていた。又、発火具も国産の燐寸が明治八年に開発されるまで摩擦による「もみぎり」や火打ち石、火打ち金などの衝撃法により種火を熾していた。当時の生活は早寝早起きが基本で日が沈むと早く寝るのが一般的だった。行灯や提灯など火の消えない工夫もされているが、薄暗く当時の生活の大変さを思う。近代になり石油やランプから電気へと変わり、ことに現代の大都会は不夜城の如くなり、灯りの有難さを感じなくなってしまったのではないか。現代はスイッチ一つで照明や冷暖房、煮炊きなど便利さに慣れ、生活の術を忘れかけているようで改めて考えさせられる問題かと思う。

（堀）

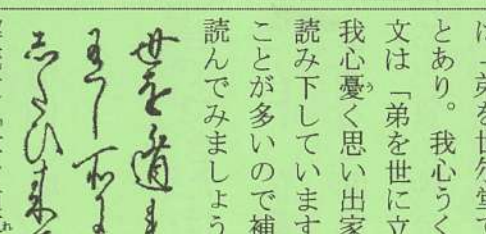
古文書入門（十八）

かなを読む（第三回）

前回はほぼかな文字だけの文を読みました。今回は漢字とかなが混在する文を、江戸時代の軍記物『北条五代記』から読んでみましょう。



①は「弟」のくずし字です。似ている字に《弟》がありますが、これは「第」のくずし字です。略字や古字・俗字など常用漢字と形が異なる漢字を異体字と呼びます。枚は杉の、枩は松の、帋は紙の異体字です。②から⑪（⑨を除く）は変体がなです。字母と崩し方を見ていきましょう。②は尓（に）で《尓》、③は堂（た）で《堂》、④は多（た）で《多》と崩されます。③と④は同じ「た」ですが字母が異なるので全く違う形です。⑤は王（わ）で《王》と崩されます。⑦は小さくて分かりづらいですが可（か）で《可》と崩され、この形でよくでてきます。⑧は里（り）で《里》と崩されます。⑨は「こ」と「と」二つの字が組み合わされて一字で書かれ「こと」と読みます。このような文字を合字と呼びます。「よ」と「り」が一字になった「与」がよく出てきます。⑩は於（お）で《於》、⑪は毛（も）で《毛》と崩されます。それでは解読文と読み下し文を作ってみましょう。解読文は「弟を世尓堂てん多め。王れを害せん者可里ことあり。我心うく於毛ひ。出家し」で、読み下し文は「弟を世に立てんため我を害せん謀あり、我心憂く思い出家し」です。「こと」を「ごと」と読み下しています。古文書では濁点が書かれないことが多いので補って読みます。これに続く文も読んでみましょう。



解読文「世を遁連。小田原総世寺尓有し所尓。家老の者於保く志多ひ來て。み可多と奈留。」

読み下し文「世を遁れ小田原総世寺にありし所に、家老の者多く慕い来たりて味方となる」

古文書を読もう
第11巻4号通巻36号
発行日　令和8年3月19日
発行　厚木市
編集　あつぎ郷土博物館
厚木市古文書解読会
住所　〒二四三―〇二〇六
厚木市下川入一三六六―四
電話　〇四六―二二五―二五一五
FAX　〇四六―二四六―三〇〇五